

つげ義春の秘湯、湯治場、隠れ里

ひととき世捨人に

川本三郎

ひなびた温泉への旅、観光名所とは無縁のローカル線の旅、うら寂しい漁師町への旅、萱ぶき屋根の残る山里への旅……いま私が好んでいる旅の仕方はつげ義春から学んだ。つげ義春は私の旅の師である。

つげ義春の漫画を知るのは一九六〇年代のなかば、学生時代に『ガロ』に載った「沼」や「チーコ」（一九六六年）、「紅い花」（一九六七年）を読んでからだ。それまでの漫画と違って、まさにひなびた、静かな魅力があった。世の中の表通りから、裏通りの路地地に入ったようなうらぶれた詩情があった。

当時、評判になったのは夢と現実が混ったような「ねじ式」（一九六八年）だったが、個人的には「海辺の

叙景」（一九六七年）、「西部田村事件」（同）、「長八の宿」（一九六八年）、「二岐溪谷」（同）、「ほんやら洞のべんさん」（同）、「リアリズムの宿」（一九七三年）などの旅漫画が好きだった。

つげ義春自身を思わせる主人公が、およそ観光地ではない地味な山里や秘湯、海辺の町、雪に埋もれた寒村を一人旅してゆく。

それまで、旅といえば修学旅行や家族旅行、あるいは社会人になってからの社員旅行しか知らなかった人間にとって、つげ義春の漫画で描かれる一人旅は、すぐれた魅力があった。

こういう旅の仕方があるのかと新鮮な思いがした。一九七〇年代のなかば頃、フリーの物書きになってから、つげ義春の真似をして日本すみずみ紀行をするようになった。そうすることで始めて旅の面白さに目覚めた。

団体旅行だと、どうしても連れとのお喋りや飲食が主になって、せっかく旅に出ながら、風景を見ずに終ってしまう。

一人旅は、ゆっくりと風景を見ることができ。旅する自分が風景のなかに溶け込んでゆける。静かなた

たずまいを見せるローカル線の無人駅、六月の雨に濡れた美しい竹やぶ、漁師町にぼつんとある理髪店の有平棒、単線の走る草土手と線路を跨ぐ野良踏切、掘立小屋のような秘湯の共同浴場……一人旅をしていると、ふだんはおそらく気にもとめない、なにげない田舎の日常風景が、懐しく親しいものとして見えてくる。

なんだか自分がつげ義春の漫画の旅人になったような温かい気持ちになる。

東北単独行

つげ義春自身はこうした、観光とは縁のない地味な土地への旅を、民俗学者の宮本常一や作家の井伏鱒二から学んだようだが、もともとつげ義春には、中心より隅っこにいるほうが心落着くという裏通り志向があり、名もないような町への旅がしっくりゆくようになったのだろう。生来の氣質が山里への一人旅の楽しさを発見したといっている。

貸本漫画を描いていた苦節時代を振り返った「義男の青春」（一九七四年）というつげ義春としては比較的長い漫画がある。

一九五六年、十九歳の時、戦前からの漫画家、岡田晟の仕事を手伝うために、神奈川県湯河原温泉の宿に泊った時の体験を描いている。

岡田晟という漫画家のことは不明にしてよく知らないが、貸本漫画の世界の人だからさほど裕福とは思えない。それが湯河原という大きな温泉街の宿屋にアシスタントのつげ義春と長逗留して仕事をしたというのは、梶井基次郎や川端康成ら昔の文士がよく温泉宿で仕事をしたことに倣ったかっただろう。冷たくいえば、いっばしの文士気取り。

十九歳のつげ義春は、このときはじめて温泉宿の良さを知ったという。

それでも湯河原は隣りの熱海ほどではないにしても、団体旅行を主にした遊興地であったことは、作品のなかに、ダンスホールやビリヤード場が描かれていることからうかがえる。「田山先生」は、内職で春画も描いていて、宿代の足しにそれをみやげ物屋に売り込みにゆく。

湯河原温泉には、「義男」にとって、気のいい女中さんがいたので思い出に残るが、温泉地として惹かれることはなかったと思う。